

# レジリエンス教育の読み物教材としての空襲体験談の利用可能性

## Availability of Air-Raid Victim's Narratives as Reading Materials for Resilience Education

藤本 一雄<sup>1</sup>, 戸塚 唯氏<sup>2</sup>, 坂巻 哲<sup>3</sup>

Kazuo FUJIMOTO<sup>1</sup>, Tadashi TOZUKA<sup>2</sup> and Satoshi SAKAMAKI<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 千葉科学大学 危機管理システム学科

Department of Risk and Crisis Management System, Chiba Institute of Science

<sup>2</sup> 千葉科学大学 教職課程

Teacher-Training Course, Chiba Institute of Science

<sup>3</sup> NTTファシリティーズ総合研究所

NTT Facilities Research Institute Inc.

The purpose of our study is to examine the availability of air-raid victim's narratives to resilience education. First, we investigated resilience factor which is the ability to bounce back from adversity by using the victim's narratives of air raid on 9 local cities in the Kanto region of Japan during World War II. The main results from the analysis on the narratives indicates that the reasons to bounce back from the adversity (sudden loss of life and/or property) are classified into five categories, "sense of purpose", "empathy", "inheritance of will", "sense of well-being and security", and "self-efficacy". Next, we asked university and high-school students for feedback as to air-raid narratives. The results suggested that the air-raid narratives are available as reading material for resilience education.

**Keywords:** *resilience, air-raid victim, narrative, adversity, education reading material*

### 1. はじめに

東日本大震災以降、政府は、国土の強靱化(ナショナル・レジリエンス)を進めているが、その一方で、国民一人ひとりのレジリエンスを高めることの重要性も指摘されている<sup>1)3)</sup>。国土や社会(組織・共同体)・システムのレジリエンスの要素としては、Robustness(頑強性)、Redundancy(冗長性)、Resourcefulness(臨機応変性、代替性)、Rapidly(迅速性、即応性)の4つのRが挙げられている<sup>4)</sup>。一方、個人のレジリエンスとは、「逆境に直面し、それを克服し、その経験によって強化される、また変容される普遍的な人の許容力」「困難あるいは脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力」などと定義されている<sup>5)</sup>。レジリエンスに関しては、すでに様々な分野での研究事例があるものの、そこで想定されている逆境は、ネガティブライフイベント(日常生活で直面するストレス・失敗など)が多く、自然災害によって人命・家屋を突然喪失するといった極めて過酷な逆境に対する妥当性は検証されていない<sup>5)</sup>。

また、より過酷な逆境を体験した者ほど、立ち直るまでには多くの年月を要することが予想される。例えば、1995年の阪神・淡路大震災の調査事例では、「自分がもはや被災者ではない」とほとんどの被災者がそう思えるようになるには10年以上の年月が必要であったとの知見が得られている<sup>6)</sup>。ただし、この知見は、様々な被災程度の被災者を対象とした調査結果に基づくものであるため、

被災者の中でも極めて過酷な体験をした者ほど、立ち直るまでにさらに多くの時間がかかる可能性も指摘されている<sup>7)</sup>。

自然災害と同様に、多数の国民が人命・家屋を突然喪失するという過酷な逆境に直面したものの、その状況からすでに数十年以上が経過した出来事の一つとして、太平洋戦争時の空襲(死者・行方不明者30~50万人)が挙げられる。「爆撃は非対人的な戦争行為であり、特定の個人の死を意図したものでないという意味で自然災害に近い」との指摘<sup>8)</sup>を踏まえれば、空襲と自然災害とは共通する部分が多いと見なすこともできるであろう。

空襲からの復興(立ち直り)を国全体のレベルで見ると、朝鮮戦争による特需景気とその後の高度経済成長により成し遂げられたため、「奇跡の復興」とも呼ばれ、その復興過程はよく知られている。一方、個人のレベルで見たとき、空襲によって人命・家屋を突然喪失するという過酷な逆境を体験した当時の人々が、戦後数十年の歳月をかけて、どのようにして立ち直ってきたのかについてはあまり知られていない。

レジリエントなロールモデルを真似ることは、レジリエンスを高める効果があるとの指摘<sup>9)</sup>を踏まえれば、空襲によって人命・家屋の喪失を体験した人々がその逆境からいかにして立ち直ってきたのかを知り・学ぶ(参考にする)ことは、将来の大規模自然災害(南海トラフ地震、首都直下地震など)の逆境から立ち直る力(レジリエンス)を高める上で有効であると考えられる。ところが、レジ

リエンスを高める(育てる)ための既存の教材等<sup>10)12)</sup>を概観したところ、東日本大震災の事例やホロコーストの事例(フランクル『夜と霧』)については扱われているものの、太平洋戦争時の空襲の事例を扱っているものは見当たらなかった。前述した通り、東日本大震災からは数年しか経過しておらず、極めて過酷な逆境に遭遇した被災者の方々は未だ立ち直りの過程にあるものと推察される。また、ホロコーストに関しては、海外の事例であり、身近な自国の先人たちによる空襲の逆境からの立ち直りを学ぶことは、郷土愛・愛国心を育てることに繋がるものと考えられる。

本研究では、空襲体験談を、レジリエンス教育へと導入するための読み物教材として、まずは、小・中学校の道徳の教科書・副読本において取り上げられることを提案したいと考えている。そこで、現行の道徳の副読本について調査した<sup>4)</sup>ところ、戦争体験に関する教材としては、杉原千畝、蜂谷弥三郎、白旗の少女(比嘉富子)などが「国際理解・親善」のテーマで取り上げられていた。また、空襲体験に関しては、東京大空襲において出産直後の母親・赤ちゃんを14人の看護師が避難させたエピソード(テーマ：生命の尊重)、大阪大空襲を受けた終戦後、家族にだまってお菓子をこっそり食べた子どものエピソード(テーマ：家族愛)が取り上げられていた。このように、戦争・空襲体験のエピソードは、レジリエンスに関連するテーマ(希望・勇気、強い意志)としては、現行の道徳の副読本では取り上げられていないことを確認できた。

以上を踏まえて、本研究では、まず、空襲による逆境からの立ち直り(レジリエンス)に関する個人的要因を明らかにするために、関東地方の空襲体験談を用いて、人命・家屋の喪失から立ち直ることができた理由を抽出・分類し、その結果を既往研究のレジリエンス要因と比較する。つぎに、レジリエンス教育へと導入するための読み物教材として空襲体験談が有効であるかを確認するため、大学生・高校生を対象として、ある1編の空襲体験談を読んでもらい、その感想について分析する。

## 2. 関東地方の空襲とその体験談の収集

### (1) 関東地方の空襲

空襲を受けた関東地方の都市は、表1に示す12都市である。なお、同表の「順位」とは、アメリカ軍が空襲攻撃目標として全国180都市を人口に基づいて順位付けしたものである<sup>13)</sup>。東京(順位：1位)は、1944年11月以降、130回の空襲を受け、特に3月10日の「東京大空襲」では8万人以上が死亡した<sup>13)</sup>。横浜(順位：5位)では、1945年5月29日の空襲により約8千から1万人の死者を生じた<sup>14)</sup>。川崎(順位：9位)では、1945年4月15日の空襲による死者は768人～1,520人とされている。これらの主要都市では、1944年の本土空襲を受けて、同年8月から学童疎開が始まっていた。このことから、関東地方の中でも、主要都市では空襲に対する危機感を抱いている一方で、その他の地方都市では、危機感が相対的に低かったことが予想される。地方都市での空襲に対する危機感が低かった可能性を示唆する事実、後述する各都市の空襲体験談(文献15～25)においても確認することができる(表2)。

将来の自然災害に対する国民の危機感は概して低いと考えられる。本研究では、レジリエンス教育への導入のための読み物教材として空襲体験談を利用することを想

定している。そこで、自然災害への危機感が低いであろう現代の国民(読者)にとって、より親近感を感じられるのは、空襲に対する危機感が低かった人の体験談であると考えた。そこで、自然災害に対する危機感との類似性を確保するために、本研究では、表1の12都市のうち、空襲に対する危機感が相対的に低かったと推察される地方都市9都市(千葉、宇都宮、前橋、日立、水戸、八王子、銚子、熊谷、平塚)を対象とすることとした。表1の地方都市の空襲被害を見ると、主要都市の被害に比べると小さいものの、各都市において、数百人から千人以上の犠牲者を生じ、数千戸から一万戸以上の焼失家屋を生じて

表1 空襲を受けた関東地方の都市

順位	都市	人的・物的被害
1	東京	1944年11月以降、130回の空襲を受けた(3月10日の空襲では8万人以上が死亡)
5	横浜	5月29日の空襲により約8千から1万人が死亡
9	川崎	4月15日の空襲による死者768人～1,520人
51	千葉	7月7日の空襲により、死者は約1000余名
55	宇都宮	7月12日の空襲により、市街地の約65%が被災、600余名が死亡
57	前橋	8月5日の空襲により、被災面積は全市の22%、死者は535人
61	日立	6月10日の空襲で死者1275人。7月19日の空襲で死者143人
75	水戸	8月2日の空襲により、市街地の約八割が焼失し242人が死亡
79	八王子	8月2日の空襲により、死者445人、焼失家屋14,000戸
81	銚子	3月10日・7月19日・8月1日の空襲により、死者380人
105	熊谷	8月15日の空襲により、死者266人、焼失家屋3,630戸
120	平塚	7月16・17日の空襲により、死者330人以上、罹災戸数7,678戸

表2 空襲に対する危機感に関する証言の例

都市	体験談
千葉	「だから、千葉の人達は、まだ東京のほうが一部やられていないで残ってるしね、千葉まではまだ番が回って来ないってな気持ちでやったんですよ。」
前橋	「殆どの人が前橋がやられるとは実感していないようだった。」
日立	「『警戒警報発令』『空襲警報発令』も日常化してくると、なれっこになり、さして緊迫感もないこのごろであった。」
八王子	「誰も空襲があるなどとは信用せず、近所の人々にそのような話をしても、『まさかね』と言う程度であった。」
銚子	「たびたび空襲警報が発令されたが、敵機は上空高く飛びすぎるだけであつたので、何の軍備もない小都市である銚子へは、まさか空襲をしかけまいと、一縷の望みをつないだりもしていた。」
熊谷	「戦乱中といえ、まさか熊谷が空襲にやられるとは、全く夢にも思っ居りませんでしたね。」

表3 収集した関東地方の空襲体験記と体験談数

都市	資料(空襲体験記)	発行年	体験談
千葉	『千葉市空襲の記録』	1980	140
宇都宮	『宇都宮空襲・戦災誌』	1975	96
前橋	『街角の証言－市民が語る前橋空襲』	1988	29
	『街角の証言－市民が語る前橋空襲(第2集)』	1994	45
日立	『戦災と生活 日立市民の記録』	1979	83
	『日立の空襲－語りつぐ戦災体験』	2003	21
水戸	『水戸空襲戦災誌』	1981	190
八王子	『八王子の空襲と戦災の記録 市民の記録編』	1985	131
銚子	『市民の記録 銚子空襲』	1974	77
熊谷	『市民のつづる熊谷戦災の記録』	1975	171
平塚	『市民が探る平塚空襲 証言編』	1998	134
合計			1,117

いることがわかる。

## (2) 空襲体験談の収集

終戦(昭和 20 年)から 20 年以上が経過した昭和 46・47 年頃、戦後 30 年(昭和 50 年)を目指して、日本各地で空襲戦災を記録する運動が活発化し、「〇〇市の空襲を記録する会」などが設立され、各都市で空襲体験記が刊行されている。そこで、各都市の空襲体験記を探す際、公立図書館 HP の検索サービスを用いて、「〇〇(市) 空襲」で検索した。その検索結果の書誌情報から、多数の個人の体験談が収録されていると予想される体験記を中心に、資料の購入・借用を行った。その結果、表 3 に示す全 9 都市の計 11 冊の体験記<sup>15)・25)</sup>を収集することができた。

表 3 を見ると、これらの体験記は、戦後 30 年以上が経過してから発行されていることがわかる。これらの体験談の中には、人命・家屋を喪失するという逆境に直面したにも関わらず、数十年をかけて立ち直った人々の体験談も含まれている可能性がある。以下では、これらの体験記に収録されている計 1,117 名の体験談を分析の対象とする。

## 3. 空襲体験談の分析

「逆境」とは、一般に「苦勞の多い境遇」「不運な境遇」「不幸な境遇」と定義されるが、本研究では、空襲によって人

表 4 空襲による逆境からの立ち直りの過程を含む体験談

体験者	逆境(人命・身体・家屋の喪失)	体験談(太字:立ち直ることができた理由)	理由カテゴリー(レジリエンス要因)
銚子 女性 30歳	「わが家も、わずか十年足らずの歳月でついに灰燼と化してしまったのだ。」→ <b>家屋の喪失</b>	「離れて暮らしていたふたりの子が、『母ちゃん、母ちゃん』と、両方から走り寄って来たのを、しっかりと両腕に抱きかかえて、しみじみと生きていた喜びをかみしめた。それと同時に、 <b>どんな事があってもこの子らのために強くがんばらなければ</b> 、と決意を堅くした。」	目的意識 (10名)
日立 女性 16歳	6月10日のB29爆撃により父が死亡。7月17日の艦砲射撃により母・兄・妹が死亡、妹は8月24日に死亡。7月19日の空襲により自宅が全焼。→ <b>人命・家屋の喪失</b>	「運命とはいえ、あまりの変わり果てた姿に、あのとき母といっしょに死んでしまえばよかったと、苦しさときびしさのあまり、両親の墓の前で泣いたこともいくたびか、 <b>だがふたりの弟をみては、私がしっかりしなければと自分で自分をはげました。</b> 」	
宇都宮 女性 27歳	夫:空襲により死亡、自宅:焼失 → <b>人命・家屋の喪失</b>	「しかし、いくら叫んでみてももう主人は帰ってこない。寄りすがる唯一の柱である主人を失ったのです。この先、 <b>子供と二人で生きてゆかなければならぬ</b> —こう思うと、何か悲しい気持ちも先立ちましたが、しかし、どこか心の中で“強い”何かが入り込んできました。」	
熊谷 男性 20歳	焼夷弾の破片により重傷を負い、数ヶ月の療養生活を送る。→ <b>身体</b> の喪失	「歴史に残る熊谷戦災に辛くも一命を落としそうになった私は、死んだ気になって、 <b>市のため社会のために貢献すべく</b> 、今懸命の努力を捧げたいと、誓いも新たにいたしました次第である。」	
銚子 女性 ?歳	家族:夫、長男(16歳)。「私かた隣家一帯たちまち火の海となり、五十余棟が焼き払われてしまった。」→ <b>家屋の喪失</b>	「戦死された御遺族のことを思えば、 <b>わが家の犠牲くらいで泣いてはなるまいと</b> 、心をとりなまし、翌日から再興日本建設の全国民の声に和し、努力しようという決心をかため、今日にいたりました。」	共感 (9名)
熊谷 女性 29歳	空襲により自宅:全焼 → <b>家屋</b> の喪失	「でも私一人では無い、熊谷の七割の人達が皆同じだ。焼けないにしても無きずと言う事はあり得ない。こうしてはおれない、後の事を考えなければ、 <b>という力が湧いて来た。</b> 」	
千葉 女性 10歳	空襲により、左手:大火傷、自宅:全焼 → <b>身体・家屋</b> の喪失	「家は焼け、何一つ残らないのに、全然悲しいという気が起こりませんでした。多分、おかあさん(自分)の心の中では、 <b>自分だけじゃないんだ、みんなもそうなんだという気持ちがあったのではないか</b> と思います。」	意志継承 (6名)
千葉 女性 16歳	空襲により、千葉師範学校女子部の生徒8名、教職員2名が死亡。→ <b>人命</b> の喪失	「『 <b>友の死を無駄にしてはならない。</b> 』今年も赤子供たちに語りながら、この思いを抱いて、教師としての道を歩き続けているのです。」	
日立 男性 41歳	B29爆撃により、防空壕が崩落し、会社の先輩・同僚ら23名が生き埋め・死亡。→ <b>人命</b> の喪失	「われわれの親しかった先輩や友人を多数、本当に残念であった。工場の形骸をながめながら、これからいかなる <b>荊の道</b> があるうとも、 <b>犠牲になられたかたがたのためにも努力しなければならぬ</b> と肝に銘じたのであった。」	幸福感・安心感 (5名)
水戸 男性 28歳	空襲により、顔・手に重度の火傷 → <b>身体</b> の喪失	「幸い口の中から内臓はやられず、目もまぶただけで眼球をやられませんでしたから、不自由はありません。ですからやはり生きていてこうして生活できたことは <b>幸いだった</b> とその後も私はずっとそう思っています。」	
銚子 女性 ?歳	「いっさいの道具と衣類を灰にして」→ <b>家屋</b> の喪失	「戦火に焼失したものは大きくとも、 <b>肉親をだれも失っていない大きな安心感に</b> 、これからが本当の戦なのだ、しっかりしなくてはと、そのころのせいっぱいの想いでした。」	自己効力感 (3名)
銚子 女性 20歳	「焼けない人の家を見ると、うらやましい。家がない。親類・両親の兄弟も皆焼け出され、…」→ <b>家屋</b> の喪失	「戦争は終わっても、私の家の戦争はこれからだ、と自分で自分にむち打ちながら、早く家がほしいと思う。『よし、 <b>男がいなくとも、何年かかっても、いつかはできる。</b> 私の気持ちは燃え上がった。』」	
銚子 男性 12歳	「みじめな気持ちで、燃え終わった家のあたりをうつろな気持ちで見回った。」→ <b>家屋</b> の喪失	「わたしおよび弟妹たちも、その間全部家庭をもち、精神的なしあわせの日を送っていますが、豊かな生活にはほど遠いのが現実の姿です。でもわたしは <b>自分に言い聞かせます。『与えられた環境下で、可能な限り最善をつくせ』</b> と。」	

表 5 空襲による逆境から立ち直ることができた理由の分類

体験談(太字: 立ち直ることができた理由)	理由カテゴリー(レジリエンス要因)
どんな事があっても、 <b>子どものために強く生きねばならぬと、涙をのんで、身を粉にしても、石にかじりついてもふたりの子どもを育てなければならぬのだと、…</b> ／どんな事があっても <b>この子らのために強くがんばらなければ、と決意を堅くした</b> ／それから再建の道をまっしぐらに歩みつけて今日まで来た私に、戦火で失われたものに対する心残りはあったにせよ、限りない勇気と、大きな生活力を与えてくれたもの… <b>わが子です</b> 。／死んだ気になって <b>市のため社会のために貢献すべく、今懸命の努力を捧げたいと、誓いも新たにいたしました</b> ／ふたりの弟をみては、 <b>私がしっかりしなければと自分で自分をばげました</b> ／この先、子供と二人で生きてゆかなければならないーこう思うと、何か悲しい気持ちも先立ちました、しかし、どこか心の中で“強い”何かが進み上げてくれました／ <b>女の役目は家を守ること</b> と考え夢中で頑張りました／歯をくいしばってでも生きよう、いや <b>我が娘のために生きなければならぬ</b> ／主人が帰らぬ人になったと知らされ、これから残された二人の子供を何とか <b>女手一人</b> で育てて行かなければならぬ／自分こそこの一家の責任者なのだ。自分の力でどうにかして人並みになりたい。… <b>そうだ。家をどんなことしても建てよう</b>	目的意識 (10名)
自分ばかりが <b>みじめではない、まだたくさんの方が困っている</b> 、強く生きようと考え直した／立ち上がらなくては、 <b>戦死したかたに申しわけない</b> と思ひながら、希望のないあすを考え、うらはらに空襲のない安心感をかえた生活が始まりました。／他人様が腕を折ってもその痛さは感じない。自分の指の傷の方の痛みは痛烈に感じる。被災ということもこれと同じこと。 <b>被災ということと同情を求めることは、むしろむだだと思った</b> 。／戦死の兵隊さんを偲んで、三人が五人分生きて、五人分働いたため、私は、がんばらなくては行けない、と自分にいいきかせた。／自分以上の最大の不幸にあわれた家庭は多数あることを聞き、 <b>深く同情すると同時に、今後いかなることをしても再起することを、皆様に教訓され決意いたしました</b> ／戦死された御遺族のことを思えば、 <b>わが家の犠牲くらいで泣いてはなるまいと、心をとりなおし、翌日から再興日本建設の全国民の声に和し、努力しよう</b> と決心をかため、今日にいたりました／でも私一人では無い、熊谷の七割の人達が皆同じだ。焼けないにしても無きずと言う事はあり得ない。こうしておれない、後の事を考えなければ、という力が湧いて来た／ <b>私の家ばかりが犠牲者ではない、もっと悲惨な家が沢山ある</b> 。しっかりしなくてはと思う。／自分だけじゃないんだ、みんなもそうなんだという気持ちがあったのではないかと思います。／	共感 (9名)
<b>さぞ死にたくなかったであろう</b> 。死んだ人が口が開けたら定めし「俺はまだ死にたくない。子供達の成長をみるまでは。家も建直さなければまだ死ねないんだ」と、叫んでいることと思う。／ <b>「友の死を無駄にしてはならない。」</b> 今年も亦子供たちに語りながら、この思いを抱いて、教師としての道を歩き続けているのです。／ <b>亡くなった友の分まで頑張らねばー</b> 。心の中で共に話し合い、共に生き続けてきている。／ <b>教員生活を続けて来た。友の死を無駄にしてはならないと思ひながら……</b> 。／工場の形骸をながめながら、これからのいかなる道があろうとも、 <b>犠牲になられたかたがたのためにも努力しなければならぬ</b> と肝に銘じたのであった。／これからの人生を、二人の分まで精いっぱい力強く生きつづけようと思つたのを忘れない。	意志継承 (6名)
しっかりと両腕に(ふたりの子)を抱きかかえて、 <b>しみじみと生きていた喜びをかみしめた</b> ／戦火に焼失したものは大きくとも、 <b>肉親をだれも失っていない大きな安心感に、これからが本当の戦なのだ、しっかりしなくてはと、そのころのせいっぱいの想いでした</b> 。／私たちが親子六人は二度も家を焼き、何一つなく、どうすることもできませんが、 <b>幸い皆無事なることです</b> 。／生きていてこうして生活できたことは <b>親子だったとその後私はずっとそう思っています</b> 。／早く私どもも働かなくてはと。このたびは生活戦です。でも、 <b>夫のいることが、ものすごく安心感をあたえてくれました</b> 。／	幸福感・安心感 (5名)
昨日を思つて悲しむより、 <b>明日に希望をもって、今日を、かいつぱい生きようと思つた</b> ／よし、男がいなくとも、何年かかっても、いつかはできる。私の気持ちは燃え上がった。／ <b>わたしは自分に言い聞かせます</b> 。「与えられた環境下で、可能な限り最善をつくせ」と。	自己効力感 (3名)
二十数年経た今、過去の目を振り返るとき、よくあのとき決意したと、最後まで銚子を捨てなかつたのだと、 <b>大きな誇りを持っております</b> 。／〇〇町の稲荷さんのうかがいで <b>は丈夫で生きていたといわれ、それを信じて頑張り働いた</b> 。	その他

命・身体・家屋を喪失した体験と定義した。そこで、すべての体験談(1,117名)を読み、人命・身体・家屋のうち、1つ以上を喪失した者の体験談のみを対象とした。また、これらの体験談の中には、逆境に関する体験のみが述べられており、その逆境からの立ち直りの過程に関する体験が述べられていないものが多数あった<sup>(2)</sup>。そこで、本研究では、立ち直りの過程を含む体験談のみを用いて、逆境から立ち直ることができた理由についての分析を進めることとした。

まず、それぞれの体験談の中から、逆境からの立ち直りに関連する意志(「強く生きようと思った」「決意した」「覚悟した」など)や行動(「生きてきた」「働いた」など)を含む箇所に着目し、その前後の文脈から立ち直ることができた理由を抜き出した。その際、1人の体験談の中に複数の理由が含まれている場合、それぞれを1つの理由として抜き出した。また、外部からの人的・物的支援などの外的要因に関する理由(例えば、「本家や親戚の援助を受けながら、一生懸命働きました」など)は除外し、主として個人の内的要因に関する理由だけを抜き出した。

以上の結果、立ち直ることができた理由は、1,117名のうち29名の体験談において確認することができた。表4に、体験者の属性(都市、性別、当時の年齢)、逆境の状況(具体的な人命・身体・家屋の喪失の状況)、体験談(立ち直ることができた理由を含む)の一部を示す。なお、各人の性別は、氏名や体験談の内容から判別することができたものの、各人の年齢は、明記されていない場合が多く、すべてを特定するには至らなかった。

つぎに、立ち直ることができた理由をカードに書き出

し、著者の1人が類似する内容ごとにグループ化し、その結果を共著者に提示した上で、最終的なグループを決定するとともに、各グループにタイトルをつけた(表5)。なお、3名以上の理由(カード)が集まったグループだけにタイトルをつけた。その結果、立ち直ることができた理由(レジリエンス要因)のタイトルとして、「目的意識」「共感」「意志継承」「幸福感・安心感」「自己効力感」の大きく5つに分類することができた(表5の「理由カテゴリー」欄)。以下では、それぞれの要因について詳しく述べる。

#### (1) 目的意識

「目的意識」は、一般的には「行動の目的に対する明確な自覚」と定義されるものである。その理由を見ると、「どんな事があっても、この子らのために強くがんばらなければ」「この先、子供と二人で生きてゆかなければならぬ」「我が娘のために生きなければならぬ」のように、「子どものために」といった重要な他者(significant others)を目的とする内容が最も多かった。このことは、逆境からの再起を図る上で、「自分のために」と利己的に考えるだけでなく、「重要な他者のために」と利他的に考えることが重要である可能性を示唆している。

#### (2) 共感

「共感」は、一般的には「他人の体験する感情や心的状態、あるいは主張を、自分が全く同じように感じたり理解したりすること」と定義されるものである。その理由の内容は、「私一人では無い、熊谷の七割の人達が皆同じだ」「自分だけじゃないんだ、みんなもそうなんだ」のように、自

分だけが逆境に置かれているわけではないと考える者と、「自分以上の最大の不幸にあわれた家庭は多数あることを聞き、深く同情する」「戦死されたご遺族のことを思えば、我が家の犠牲くらいで泣いてはなるまい」「私の家ばかりが犠牲者ではない、もっと悲惨な家が沢山ある」のように、自分よりもさらに過酷な逆境に置かれている人がいると考える者の2種類の傾向が見られた。

### (3) 意志継承

「意志継承」は、親族以外の人命を喪失した者に多く見られた理由である。例えば、「友の死を無駄にしてはならない」「犠牲になられたかたがたのためにも努力しなければならない」などである。この「意志継承」は、災害時の「生きる力」に関する探索的研究<sup>26)</sup>での「意志のバトン」に相当すると言える。その例として、本研究と同様に「妻の死を経験し、死に際まで人助けをしていた妻の意志を継ごうと考えた」のように犠牲者の意志(遺志)を遺族が継承する事例がある一方で、「震災後、息子が家業(農家)を継ぐと言って、そのために仕事を再開する意欲が湧いてきた」との事例も見られた<sup>26)</sup>。それゆえ、「意志継承」は、人命の喪失を体験した者だけに限定される理由ではない可能性が考えられる。

### (4) 幸福感・安心感

「幸福感・安心感」は、人命を喪失した者には見られず、身体・家屋を喪失した者だけに見られた理由である。具体的には、「家は焼けても、家族4人、無事だった私たちは本当に幸せだった」「肉親の誰もが傷を負わず…不幸中の幸いであった」のように、空襲による不幸に見舞われたものの、自分だけでなく家族も生き残ったことに対して幸福感・安心感を感じていた。この幸福感・安心感は、1940年ロンドン大空襲でのサバイバーの1人である若い女性(空襲によって家屋は壊れたものの、恋人とその両親は無事)の証言「多くの人が亡くなり負傷した夜に、不謹慎かもしれないけれど、わたしの一生であれほど純粋で一点の曇りもない幸せを感じたことはありません」<sup>27)</sup>とも符合している。

その一方で、体験談の中には「焼けない人の家を見ると、うらやましい」「戦後の生活の折々に、家を失い焼け出された者の辛さを何度となく味わい」「村の大半は焼けなかったのです。その村にあって焼けだされた私たちは不幸でした」などのように、「幸福感」を感じる事が困難な者もいた。

### (5) 自己効力感

「自己効力感」は、一般的には「目標達成のために必要な行動を効果的に遂行できるという確信」と定義されるものであり、それを生み出す要因として、「遂行行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「情動的喚起」が挙げられている<sup>28)</sup>。今回収集できた体験談からは、言語的説得(「わたしは自分に言い聞かせます」など)が先行要因として確認することができた。

空襲の逆境から立ち直ることができた理由として、「目的意識」「共感」「意志継承」「幸福感・安心感」「自己効力感」の5つの要因が抽出された(図1中央)。一方、先行研究<sup>29)</sup>では、日常生活で直面する困難やストレスなどの逆境から立ち直る力(レジリエンス)を構成する能力として、「感情調整力」「衝動調整力」「楽観力」「原因分析力」「共感

力」「自己効力感」「リーチアウト力」(働きかける能力)が挙げられている(図1左)。また、別の先行研究<sup>30)</sup>においては、復活力(レジリエンス)を「システム、企業、個人が極度の状況変化に直面したとき、基本的な目的と健全性を維持する能力」と定義している(図1右)。これらと比較すると、「目的意識(目的維持)」「共感(共感力)」「自己効力感」が共通していることから、これらの要因(能力)は逆境の種類・程度によらないものと考えられる。これに対して、「意志継承」と「幸福感・安心感」は、空襲の逆境からの立ち直りに特有の理由と見なせる。

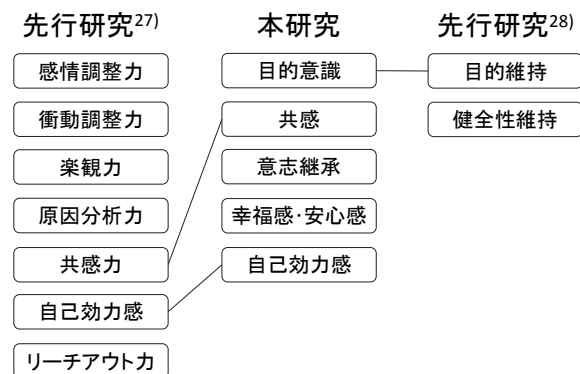


図1 逆境から立ち直るための要因(能力)

## 4. 読み物教材としての利用可能性に関する試行

ここまでの検討により、空襲によって人命・家屋を突然失ったにもかかわらず、その逆境から長い年月をかけて立ち直ってきた人々の体験談の中には、レジリエンス要因が含まれている場合があることを確認した。

この結果を踏まえて、つぎに、空襲体験談がレジリエンスを高めるための読み物教材として利用可能であるかについて検討する。そこで、ある1編の体験談を題材として、それを実際に読んでもらい、その感想について分析することとした。本研究で題材として取り上げた体験談は、銚子市の空襲体験記に収録されている図2に示す体験談(文献23のpp.317-327)である。

この体験談の執筆者は、5人の子ども(2男3女)の母である。ただし、空襲当日は、長男は京都の学校に、次女は東京の学校にいたため、自宅(銚子市)にいた家族は、自分、夫、長女(18歳)、三女(14歳)、次男(12歳)の5名であった。

この体験談の前半部分(約3,700字)には、1945年7月19日深夜の空襲(図3の青色が焼失地域)により、まず、長女が焼夷弾による火傷と機銃掃射により死亡したこと、自宅が焼夷弾により焼失したこと、空襲からの避難の際に行方不明になっていた次男が、空襲から約2週間後、土の中に埋まって死亡しているのを飼い犬が発見したこと、が綴られている。

そして、体験談の後半部分(約2,400字)には、自分が「子ども3人が5人分生きて、5人分働くため、私は、がんばらなくてはいけない」「昨日を思って悲しむより、明日に希望をもって、今日を力いっぱい生きようと思った」などの考えのもと、住宅の再建、子ども3人の教育費を捻出するための苦勞(貸家の売却、インフレ、製粉精米所

の新規事業などが綴られている。

なお、この体験談を取り上げた理由としては、空襲によって人命と家屋の両方を喪失していること、終戦後の立ち直りの過程が詳細かつ十分な量で記述されていること<sup>3)</sup>、が挙げられる。

### (1) 質問紙調査

著者らの1人が担当する教職課程の授業科目「教育相談の理論と方法」を履修している大学生(22名)を対象として、「レジリエンス」に関する回の授業(2017年1月11日)の時間を一部利用して、質問紙調査を実施した。調査の手順は、まず、大学生(被調査者)に銚子空襲の概要を口頭で説明した後、体験談(前半)を読んでもらい、質問紙に回答してもらった(約20分)。その後、体験談(後半)を読んでもらい、質問紙に回答してもらった(約20分)。

体験談(前半)は手記の筆者が受けた空襲被害について描写されている。多くの戦争に関する読み物では被害を受けた部分のみを描写していることが多いが、著者らは読者のレジリエンス教育への導入を図るためには、それだけでは不十分であり、登場人物がその後どのような苦難をどのように乗り越えて行ったかという「立ち直りの過程」を示すことが重要だと考えている。そこで、本研究では、立ち直りの過程(体験談の後半)の部分の重要性を明らかにするために、体験談(前半)の読後と体験談(後半)の読後の意識変化を比較することとした。

なお、体験談の中には、「挺身隊」「予科練」などのわかりにくい用語が含まれているため、用語集も配布した。質問項目は、体験談を読んだ感想、外傷体験後成長尺度<sup>31)</sup>などである。感想については、文章完成形式の定型自由文<sup>32)</sup>の質問文を提示し、自由に理由・感想を記述してもらった。

### (2) 分析結果

体験談を読んだ感想に関して、「怖くて読み進めなくなかった」「考えさせられた」「難しかった」について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で尋ねた。その結果、「怖くて読み進めなくなかった」に関しては、否定的な評価が7割を占めており、大学生にとっては怖くて読めないことはなさそうである。「考えさせられた」については、肯定的な評価で9割を占めていた。「難しかった」に関しては、否定的な評価が4割を占めることから、中学生・高校生にとってはより難しい内容であると推測できる。

体験談を読んだ感想を自由記述で回答してもらった結果に関しては、筆者二人で内容によって分類した(表6)。まず、体験談(前半)については、「悲しい(悲惨・かわいそう)」の10件、「驚いた」の6件、「怖い(不安)」の5件などのマイナス感情を表すものが多くみられた。その他には、「助け合いが大切」の8件、「戦争をしてはいけない」の5件などがみられた。これに対して、体験談(後半)では、「私も…しようと思った」の9件が最も多かったことから、空襲体験談には読者の意志・意欲を高める効果があるように思われる。また、「子どもたちのための努力」が8件であり、これは利他的な目的意識の大切さを感じ取っているものと判断される。その他には、自分の親に対する「感謝」の5件、現在の平和に対する「幸福感」の3件などが挙げられていた。

つぎに、外傷体験後成長尺度<sup>31)</sup>の5因子(1. 人間の強さ、2. 他者とのつながり、3. 新たな可能性、4. 人生の再認識、

5. 心の変化)の下位尺度(21項目)を参考にして、1.「自分は困難に対処することができると思う」、2.「人間関係を良くする努力をするべきだと思う」、3.「人生は自分の力でより良くすることができると思う」、4.「人生において何が大切かを考えるべきだと思う」、5.「精神的なことがらへの理解を深めるべきだと思う」について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で尋ねた(表7)。なお、本来であれば、文献31)の21項目を尋ねるべきであるが、回答時間の制約があったため、5因子の中から代表的な項目を1つずつ尋ねた。

表7では、回答者数が最も多かったものを赤色で示してある。体験談(前半)と体験談(後半)での回答者数を比較すると、「精神的なことがらへの理解を深めるべきだと思う」以外の質問に関しては、変化なしまたは肯定的な選択肢へと移行している。また、前半と後半の回答の間に差があるのかを確認するため、対応のあるt検定を行った

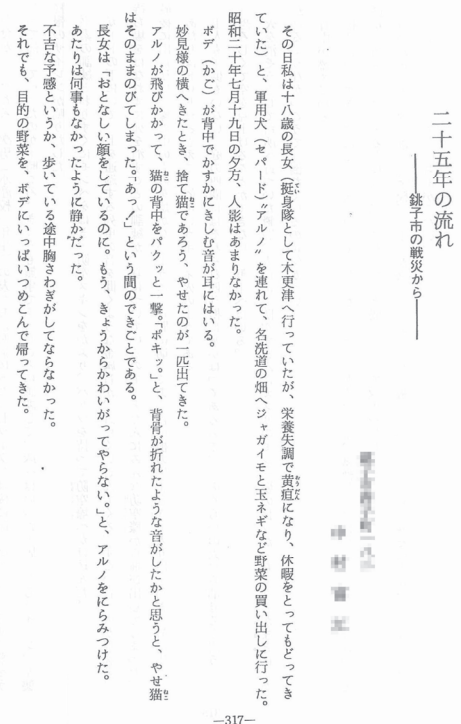


図2 使用した体験談<sup>21)</sup> (一部抜粋)

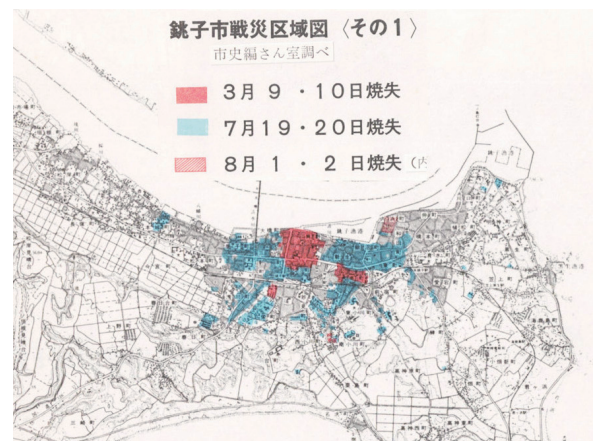


図3 銚子空襲による焼失地域<sup>17)</sup>

表 6 体験談を読んだ感想の比較

体験談(前半)		体験談(後半)	
悲しい(悲惨・かわいそう)	10	私も・・・しようと思った	9
助け合いが大切	8	子どもたちのための努力	8
驚いた	6	感謝(自分の親に対する)	5
怖い(不安)	5	幸福感(現在の平和に対する)	3
戦争をしてはいけない	5		

表 7 外傷体験後成長尺度の変化

体験談(前半)	①	②	③	④	⑤
自分は困難に対処することができると思う。	0	5	12	3	0
人間関係を良くする努力をするべきだと思う。	0	1	1	11	7
人生は自分の力でより良くすることができると思う。	0	1	2	14	3
人生において何が大切かを考えるべきだと思う。	0	2	1	11	6
精神的なことからへの理解を深めるべきだと思う。	0	0	2	13	5

体験談(後半)	①	②	③	④	⑤
自分は困難に対処することができると思う。	0	3	12	6	1
人間関係を良くする努力をするべきだと思う。	0	1	2	8	11
人生は自分の力でより良くすることができると思う。	0	1	2	11	8
人生において何が大切かを考えるべきだと思う。	0	2	3	5	12
精神的なことからへの理解を深めるべきだと思う。	0	1	2	13	6

①全くそう思わない、②そう思わない、③どちらとも言えない、④そう思う、⑤とてもそう思う

ところ、「人生において何が大切かを考えるべきだと思う」と「人間関係を良くする努力をするべきだと思う」については有意な差を確認することができた(前者は  $t(19)=2.67, p<0.05$ , 後者は  $t(19)=2.18, p<0.05$ )。「人生において何が大切かを考えるべきだと思う」は、空襲体験談から抽出されたレジリエンス要因のうち「目的意識」に対応するものと考えられ、空襲体験談を読むことは「目的意識」を自覚させる効果が期待できる。

さらに、翌週の授業において、読み物教材としての利用可能性について被調査者に話し合いをしてもらった。その結果、「レジリエンスの教材として良いと思う」「読んでいて怖いということはなかった(中学生に読ませても大丈夫だと思う)」などの肯定的な意見の一方で、「読むのに時間がかかった(もっと短い方が良い)」「中学生の教材として勧められない(特に前半部分の悲惨な描写)」など否定的な意見も見られた。このため、空襲体験談を教材として利用する場合には、文章の量を少なくしたり、空襲時の悲惨な描写を避けたりするといった配慮が必要な場合があることを確認した。

### 5. 読み物教材としての利用可能性に関する検証

前述の大学生を対象とした予備調査の結果を踏まえて、つぎに、中学生・高校生にとって空襲体験談がレジリエンス教育へと導入するための読み物教材として有効であるのかを確認するため、千葉県銚子市の A 高等学校の 1 年生 163 名を対象として、空襲体験談に関する質問紙調査を 2017 年 7 月 22 日に実施した。使用した体験談は、前述の体験談(図 2)と同じである。ただし、体験談のうち前半部分に関しては、空襲時の悲惨な描写を含めないため、また、文章の量を少なくするために、要約文(約 300 字)を作成した。

#### (1) 質問紙調査

調査の手順として、まず、銚子空襲の概要、体験談(前



写真 1 質問紙調査の様子

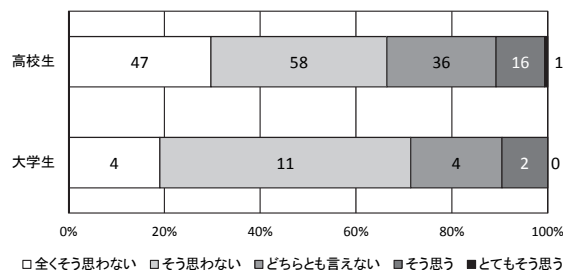


図 4 感想「怖くて読み進めたくなかった」の比較

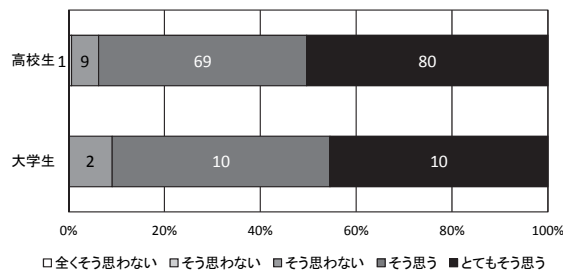


図 5 感想「考えさせられた」の比較

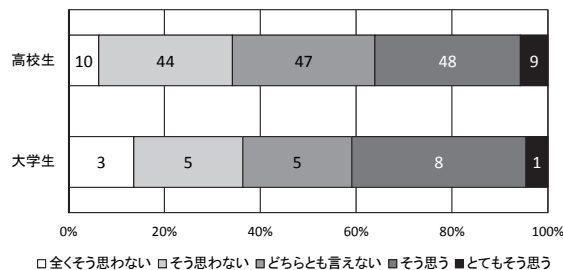


図 6 感想「難しかった」の比較

半)の要約文、体験談(後半)の原文、質問紙がセットになった資料を高校生(被調査者)に配布した。その上で、著者らの一人が銚子空襲の概要を読み上げた後、体験談(前半)の要約文も読み上げ、引き続き、体験談(後半)を読み

表 8 体験談を読んだ感想(一部抜粋)

体験談を読んだ感想	カテゴリー
5人の子どもが3人に減ってしまったので、悲しかった／大人数だった家族が亡くなって少なくなってしまったので、とてもかなしいと思いました／突然家族を2人失ったので、悲しい／ある日突然家族と自宅を失ってしまったので、悲しい	悲しい
母親が子どもたちのために努力していたので、いい母親だと思った／自分の子ども達のためにお金を必死に増やしているの、子どものことをしっかり考えている／家や製米機などを売って子どもたちを進学させたりしたので、とても子ども思いですごいと思った／子供のために頑張っているの、とても尊敬した	子ども(家族)のために
社会の片隅にいても、できることがあると思うので、私たちにできる小さな親切をしていきたい／兄、姉、妹のために自分の身をけずっていたので、見習いたいと思った／家族全員がお互いを思い合った行動をしていたので、自分もお手本にしていきたい／どんな時も前向きに頑張っていたので、私も頑張ろうと思ったし、はげみになった／わが子を2人と家を失った方が「明日に希望をもっている」ので、私も前向きに昨日のことを振り返らず頑張ろうと思った	私も…しよう(したい)と思った
どんなことがあっても前向きなので、すばらしいと思った／家族を失っても前を向いていたので、すごいと思った／2人の子と自宅を失ってしまったので、悲しいが、前向きに生きようとしていて感動した／前向きな気持ちが書かれていたので、最後のページの文に感動した	前向き
空襲の被害を受けでも前向きに物事を考えていたので、すごく強い人だと思った／つらいことがあってもまっすぐ前を向いていたので、母親の強さを感じることができた／どんなに辛くてもお金をため子供を大学に行かさせたので、芯の強い人だと思った	強い

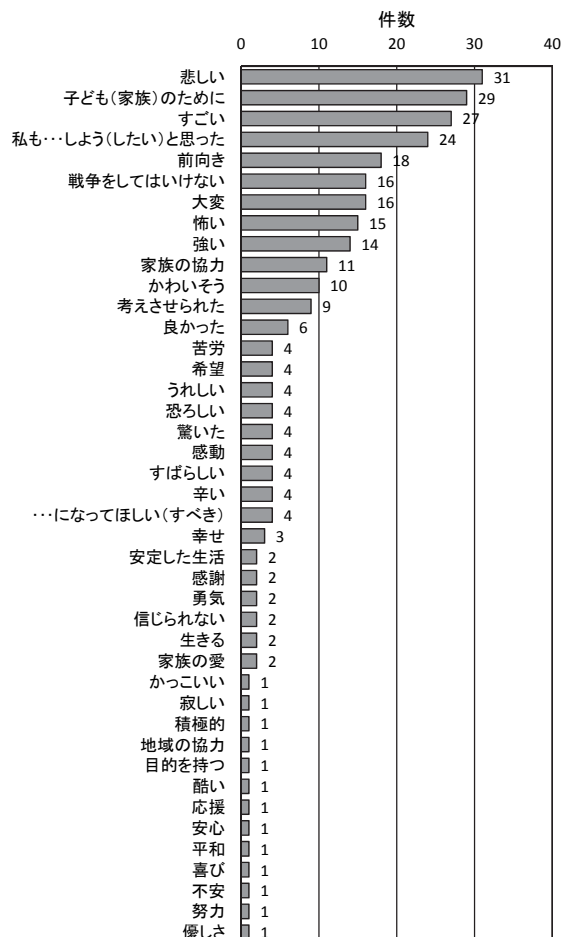


図 7 体験談を読んだ感想の集計結果

上げた(約 15 分)。この間、被調査者には配布資料を見てもらいながら黙読してもらった。その後、被調査者に質問紙に回答してもらった(約 5 分)。質問項目は、体験談

を読んだ感想について、選択肢形式と自由記述形式で尋ねた。なお、自由記述形式の感想については、文章完成形式の定型自由文の質問文を提示し、自由に理由・感想(1~3 個)を記述してもらった。その結果、159 名の被調査者から回答を得ることができた。

## (2) 分析結果

まず、選択肢形式の感想の結果を、前述の大学生の結果と比較して図 4~6 に示す。「怖くて読み進めなくなかった」(図 4)に関しては、大学生の結果に比べて、高校生では「全くそう思わない」の割合が増えており、これは、悲惨な描写を含む体験談の前半部分を要約文にしたためとも考えられる。ただし、高校生と大学生の回答の間に差があるのかを確認するため、対応のない検定を行ったところ、高校生と大学生の回答に有意差は見られなかった( $t(177)=0.17, n.s.$ )。

「考えさせられた」(図 5)については、高校生と大学生の結果で大きな違いは見られなかった( $t(179)=0.49, n.s.$ )。「難しかった」(図 6)に関しては、高校生・大学生ともに、難しいと思う者の割合と難しいと思わない者の割合は同程度であり、有意差は見られなかった( $t(178)=0.24, n.s.$ )。

つぎに、自由記述形式での感想に関しては、158 名から回答が得られ、計 293 個の感想が得られた。感想の一例を表 8 に示す。これらの自由記述の感想に対して、筆者三人で内容によって分類した(図 7)。その際、1 人の感想の中に複数の内容が含まれている場合、それぞれを 1 つの内容として抽出した。また、被調査者自身の感想ではなく、執筆者の気持ちを代弁していると読み取れる感想(例えば、「お母さんは家族が 2 人いなくなったので、とてもショックを受けている」など)については除外した。

その結果、最も多かった感想は「悲しい」の 31 件であり、大学生を対象とした結果と同様であった。つぎに多かった感想は、「子ども(家族)のために」の 29 件であり、これは空襲体験談から抽出された「利他的な目的意識」に対応するものと考えられる。「私も…しよう(したい)と思った」は 24 件であり、これは空襲体験談から抽出された「自己効力感」に通じるものと考えられる。その他に、大学生の結果では見られなかった感想として、「前向き」の 18 件や「強い」の 14 件が上位に挙げられている。「前向き」に関しては、空襲体験談のレジリエンス要因としては抽出することができなかったものの、先行研究<sup>25)</sup>のレジリエンス要因のうち「楽観力」に相当するものと考えられる。その他には、「幸福感・安心感」に通じるであろう「良かった」6 件、「うれしい」4 件、「幸せ」3 件、安定した生活「2 件」、「安心」1 件、「平和」1 件、「喜び」1 件なども挙げられていた。

以上のとおり、空襲体験談を読んだ高校生の感想の中には、レジリエンス要因に関連する内容が上位を占めていることが確認できた。このことから、空襲体験談がレジリエンス教育へと導入するための読み物教材として利用可能であるものと考えられる。

## 6. 結論

本研究の目的は、太平洋戦争時の空襲の体験談がレジリエンス教育へと導入するための読み物教材として利用可能であるかを明らかにすることである。まず、空襲による逆境からの立ち直り(レジリエンス)に関する個人的



要因を明らかにするために、関東地方の12都市の空襲体験談(1,117名)を用いて、人命・身体・家屋の喪失から立ち直ることができた理由を抽出・分類した。その結果、空襲体験談から「目的意識」「共感」「意志継承」「幸福感・安心感」「自己効力感」がレジリエンス要因として抽出され、以下の知見が得られた。

・「目的意識」に関しては、「自分のために」ではなく、「他者(例えば、子ども)のために」といった利他的な目的意識がほとんどを占めていた。

・「共感」に関しては、「自分だけが逆境に置かれているわけではない」と考える者と、「自分より過酷な逆境に置かれている人がいる」と考える者の2種類が見られた。

・「意志継承」に関しては、親族以外の人命を喪失した者に多く見られた。

・「幸福感・安心感」に関しては、人命を喪失した者には見られず、身体・家屋の喪失(空襲による火傷・自宅の焼失)を体験した者だけに見られた。

これらのレジリエンス要因を、既往研究のレジリエンス要因と比較したところ、おおむね整合する結果が得られた。

つぎに、レジリエンス教育へと導入するための読み物教材として空襲体験談が有効であるかを確認するため、大学生・高校生を対象として、ある1編の空襲体験談を読んでもらい、その感想について分析した。

大学生を対象とした予備調査を行ったところ、空襲体験談を読むことで「目的意識」を自覚させる効果が期待できること、空襲体験談を教材として利用する場合には、文章の量を少なくしたり、空襲時の悲惨な描写を避けたりするといった配慮が必要な場合があることを確認した。

この結果を踏まえて、高校生を対象とした調査を行った結果、「子ども(家族)のために」「私も…しよう(したい)と思った」「前向き」などレジリエンス要因に関連する感想が多く見られることを確認した。以上の結果から、空襲体験談がレジリエンス教育へと導入するための読み物教材として利用可能であるものと結論づけた。

なお、今後の課題として、今回使用した1編の体験談は、銚子市のものであり、それを読んでもらった被調査者も銚子市の大学生・高校生であった。このため、他地域の体験談を読んでも、同じような結果が得られるのかについて検討する必要がある。また、今回の体験談を読んだ感想の中には、レジリエンス要因が数多く見られたが、その他の体験談でも同様の効果が得られるかは定かではない。このため、他の体験談を読んでもらい、どのような効果が得られるのかを確認することも必要と考える。

最後に、本研究を遂行する中で気づいた点を付言する。まず、1点目は、防災教育におけるレジリエンス教育の重要性である。将来発生が懸念される大規模自然災害に備えるために、国民(児童・生徒を含む)一人ひとりに対する防災教育の重要性については論を俟たない。しかしながら、従来の防災教育では、自然災害によって万が一過酷な逆境に直面したとき、そこから立ち直ることについてはあまり考慮されていなかったように思われる。防災教育を通じて、日頃から個人のレジリエンスを高めておくことは、日常生活でのネガティブイベントからの立ち直りにも有効であると考えられる。

2点目は、逆境から立ち直った人々の体験談を記録することの重要性である。本研究では、太平洋戦争時の空襲による逆境(人命・身体・家屋の喪失)に遭遇しながら

も、数十年の年月をかけて立ち直ってきた市井の人々の体験談の中に、レジリエンス教育のロールモデルとすべき事例が数多く含まれていることを確認した。今後は、1995年阪神・淡路大震災や2011年東日本大震災によって過酷な逆境に直面した被災者のうち、その逆境から数十年をかけて立ち直った人々に体験談を執筆してもらい、これらの記録を共有・継承していくことが必要と考える。

## 謝辞

本研究に取り組むきっかけは、2014年8月、当時・千葉科学大学学生(千葉県銚子市出身)の山口祐司氏から『市民の記録 銚子空襲』(文献23)の存在をご教示いただいたことによるものである。また、本研究を遂行するにあたり、多数の執筆者・編集者の皆様のご尽力により作成された空襲体験記を使用させていただいた。記して謝意を表する。

## 補注

- (1) 調査した道徳の副読本は、文溪堂、学研、教育出版、光村図書、学校図書、東京書籍、日本文教出版が発行している小学校5・6年生と中学校1〜3年生の副読本26冊である。
- (2) 紙面の都合上、戦後の体験談を省略している場合がみられた。例えば、『水戸空襲戦災誌』<sup>21)</sup>の「戦中戦後の生活体験記として秀れたもの、貴重なものもかなりあったが、それらも特に水戸空襲前後にしぼるといふ編集の建前から割愛せざるを得なかった。遺憾であったがやむを得なかった」(p.614)や『八王子の空襲と戦災の記録 市民の記録』<sup>20)</sup>の「市民が戦時下を生きぬいてきた貴重なあかしであるため、全て収録したかったが紙数の都合上一部内容を省略せざるをえなかった」(あとがき)などである。
- (3) 『市民の記録 銚子空襲』<sup>23)</sup>では、体験記の募集にあたり、「主題 (1)わたしの空襲体験 (2)わたしの戦後の生活体験 どちらでもかまいません。また両方でもかまいません」(pp.4-5)としており、戦後の生活体験も記述されている体験談が多く含まれている。

## 参考文献

- 1) 鈴木康弘：国民の災害レジリエンスを高めるための研究と教育のあり方—地球人間圏の視点から—(日本学術会議公開シンポジウム「東日本大震災を教訓とした安全安心で持続可能な社会の形成に向けて」講演資料)；<http://www.scj.go.jp/ja/event/pdf2/140907j.pdf> 閲覧2017年2月2日
- 2) 仁平義明：災害からのレジリエンス：被災者側の視点、学術の動向、2015年7月号、pp.44-54、2015。
- 3) 目黒公郎：自助・共助と安全・安心なまちづくり、新都市、Vol.68、No.1、pp.13-20、2014。
- 4) 河田恵昭：新時代の企業防災～3.11の教訓に学ぶ地震対策～、中災防新書、2013
- 5) 齊藤和貴・岡安孝弘：最近のレジリエンス研究の動向と課題、明治大学心理社会学研究、No.4、pp.72-84、2009。
- 6) 木村玲欧・田村圭子・井ノ口宗成・林春男・立木茂雄：10年を超える生活再建過程における被災者の現状と課題—阪神・淡路大震災から16年間を振り返る復興調査結果—、地域安全学会論文集、No.27、pp.35-45、2015。
- 7) 立木茂雄：災害と復興の社会学、萌書房、p.183、2016
- 8) デーブ・グロスマン：戦争における「人殺し」の心理学、筑摩書房、p.192、2004。
- 9) スティーブン・M・サウスウィック、デニス・S・チャーニー：レジリエンス：人生の危機を乗り越えるための科学と

- 10の処方箋, 岩崎学術出版社, p.277, 2015.
- 10) イローナ・ボニウェル 監修:「子どもの「逆境に負けない心」を育てる本, 法研, 2014.
  - 11) 深谷昌志 監修:「元気・しなやかな心」を育てるレジリエンス教材集1, 明治図書, 2015.
  - 12) 深谷昌志 監修:「へこたれない心」を育てるレジリエンス教材集2, 明治図書, 2015.
  - 13) NHK スペシャル取材班:ドキュメント 東京大空襲—発掘された 583 枚の未公開写真を追う—, 新潮社, pp.220-221, 2012.
  - 14) 平塚征緒:日本空襲の全貌, 洋泉社, 2015.
  - 15) 千葉市空襲を記録する会編:千葉市空襲の記録, 600p., 1980.
  - 16) 宇都宮空襲・戦災誌編集部:宇都宮空襲・戦災誌, 宇都宮市戦災を調査する会, 568p., 1975.
  - 17) 前橋空襲を記録する会:街角の証言—市民が語る前橋空襲, 108p., 1988.
  - 18) 前橋空襲を記録する会:街角の証言—市民が語る前橋空襲(第2集), 145p., 1994.
  - 19) 日立市の戦災と生活を記録する市民の会:戦災と生活 日立市民の記録, 日立市役所, 601p., 1979.
  - 20) 日立市郷土博物館:日立の空襲—語りつく戦災体験—, 99p., 2003.
  - 21) 水戸空襲戦災記録の会:水戸空襲戦災誌, 水戸市, 617p., 1981.
  - 22) 八王子市郷土資料館編:八王子の空襲と戦災の記録 市民の記録編, 八王子市教育委員会, 401p., 1985.
  - 23) 銚子市役所企画調整部市史編さん室編:市民の記録 銚子空襲, 銚子市役所, 678p., 1974.
  - 24) 熊谷市文化連合:市民のつづる熊谷戦災の記録, 487p., 1975.
  - 25) 平塚の空襲と戦災を記録する会:市民が探る平塚空襲 証言編, 平塚市博物館, 318p., 1998.
  - 26) 佐藤翔輔・杉浦元亮・野内 類・邑本俊亮・阿部恒之・本多明生・岩崎雅宏・今村文彦:災害時の「生きる力」に関する探索的研究—東日本大震災の被災経験者の証言から—, 地域安全学会論文集, No.23, pp.1-9, 2014.
  - 27) レベッカ・ソルニット:災害ユートピア, 亜紀書房, pp.141-160, 2010.
  - 28) 山内光哉・春木 豊:グラフィック学習心理学, サイエンス社, 2001.
  - 29) カレン・ライビッチ, アンドリュー・シャター:レジリエンスの教科書—逆境をはね返す世界最強トレーニング—, 草思社, pp.33-54, 2015.
  - 30) アンドリュー・ゾッリ:レジリエンス 復活力—あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か—, ダイヤモンド社, p.10, 2013.
  - 31) Tedeschi, R.G. and Calhoun, L.G.: The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma, Journal of Traumatic Stress, 9(3), pp.455-471, 1996.
  - 32) 林 俊克:Excel で学ぶテキストマイニング入門, オーム社, 237p., 2002.

(原稿受付 2017.9.9)

(登載決定 2018.1.20)